

菊池為邦・重朝の墓

玉祥寺の墓地にある菊池為邦（1430-1488）とその子重朝（1449-1493）の墓は、菊池氏が政治的な目的から文化の振興へと首尾よく転換を果たした時代の名残です。

父の死後、為邦が15歳で当主となったとき、菊池氏の戦場での栄光の日々はとうに終わりを告げ、残された領土を維持することさえ困難になっていました。為邦は、一族の力を地方文化の支援に向け、武士や町人に教育を施し、彼らの知的・精神的な探求を奨励しました。

36歳のとき、為邦は重朝に地位を譲って当主を退き、当時日本の禅学者の間で特に大きな影響力を持っていた中国の禅宗の語録『碧巖録』の研究に専念します。また、玉祥寺を自身の菩提寺（先祖代々のお墓を祀る寺）として建立しました。

重朝は父の文化育成の努力を引き継ぎ、彼の指導の下、菊池は仏教や儒教の学問の中心地となり茶の文化も花開きました。重朝は孔子を祀る堂を建て、孔子とその弟子たちの像を安置するよう命じました。この堂を中心として学問の中心地が形成され、遠く京都から学者たちが菊池に集まり、哲学や宗教について議論を繰り広げました。